

徒野先輩の怪異騙り

佐倉みづき Mizuki Sakura



アルファポリス文庫

プロローグ 異界への誘い

ふ、と意識が浮上した。

一定のリズムで刻まれる電車の揺れが心地よく、うつかりうたた寝をしていたらしい。トンネルに入ったのか、窓の外は真つ暗だ。

もともと、電車に乗り込んだのは夜も遅い時間帯だった。私の他に数名乗っていたはずの乗客の姿はすでに見当たらない。

いったいどれだけ居眠りしていたのだろう。乗り過ごしていたら大変だ。咄嗟にドアの上部に設えられた電光掲示板に表示された次の停車駅を確認して——困惑した。

『鬼』

その一文字だけが書かれていた。

「え……?」

目を擦り、もう一度電光掲示板を見る。

何度確認しても、そこに表示された文字は変わらなかった。

この路線は通勤で利用しているものの、終点まで乗ったことはない。だから駅名に覚えがなくても不思議ではないけれど。

となると、最寄り駅をとくに通りすぎてしまったわけだ。次の駅で降りて、折り返しの電車に乗り直さないと。

いや……そもそも。乗ったのは終電ギリギリだった。下手をするとこの辺りで一泊して始発に乗らないといけないかも。ビジネスホテルか、あるいはネットカフェか。泊まれるような場所があればいいのだけど。

電車がトンネルを抜ける。車窓から見えるのはトンネルの中と同じ、黒い絵の具で塗り潰されたような景色だ。そこには明かり一つ見当たらない。ひよつとして、とんでもない田舎に来てしまったんだろうか。

『次はー、きさらぎー、きさらぎー』

合成音声じみた、抑揚のないアナウンスが駅名を告げる。

鬼と書いてきさらぎと読むのか。変わった駅名だ。でも、そんなところあったっけ？

疲労がピークに達しているのか、どうも思考が曖昧だ。

ゆるやかに速度を落とした電車がホームに滑り込む。

私はカバンを抱えて電車を降りた。

漫然と降りたのではない。ここで降りなければいけないと、なぜか強く思った。

ホームに降り立った私は愕然^{がくぜん}とした。

「ここ……どこ？」

ホームから見えたのは、殺風景な田舎の景色そのものだった。自然豊かと言えば聞こえはいいが、はっきり言ってなにもない。周囲には建物らしき影すら見当たらない。ぽつぽつと点在する街灯に照らされた道の奥には、どこまでも続く黒い山の稜線^{りやうせん}が見える。

私が戸惑っている間に、電車はホームから発車してしまった。

これで帰ることはできなくなった。

遠くからどん、どん……と規則的な太鼓の音が聞こえてくる。

お祭りなんてやっている時期だっけ。

なんとなく、薄気味悪い場所だ。あまり長居はしたくない。

不安に駆られた私は、親友に助けを求めることにした。

第一話 水辺に潜むモノ

肝試しに行こう、と言いつ出したのは、飲み会の発起人である沢井だった。

高校からの友人三人で彼の住居であるアパートに押しかけ、近所迷惑を顧みず飲めや歌えのどんちゃん騒ぎを深夜まで続けた後、次第に酒の量が減り、ただ飲み食いするのにも飽きてきた頃のこと。

「うちの近くの川、河童が出るとかって噂があるんだけどさ、その上流でレイプされて死んだ女が化けて出るんだと。ちよつくら見に行ってみようぜ」

沢井の家の近くには下和久川という川が流れている。

その川を遡っていった山の中で近頃、若い女の死体が見つかったという。沢井曰く、女はレイプされたことを苦に川に飛び込んで自殺したそうだと。

話を聞いた川村が眉をひそめた。

「なにそれ、そんな話聞いたことねーけど」

「SNSで見たんだよ。それに、お前この辺に住んでねーじゃん」

理性が残っていれば、そんな不謹慎極まりない提案は却下されていただろう。けれ

どこの時は誰も彼もが酔っ払っていて、正常な判断を下せなかった。酔って気が大きくなり、怖いもの知らずとなった若者が近場の心霊スポットで度胸試しをしたがるのは必然だった。

——今になって、ここでやめておけばよかったと後悔している。

沢井の家を出た俺たちは川沿いを遡り、道中で購入した懐中電灯を手にもって山道を登る。夜の登山は足元が覚束なかったが、適度な緊張感で酔いを覚ますにはちょうどよかった。山の澄んだ空気が日々の生活でくたびれた心身を癒やしてくれるようだった。

息が切れた頃に辿りついたのは、川がU字に大きくうねっている場所だった。ぼんやりした月明かりと人数分の懐中電灯だけが心許なく辺りを照らす。

当たり前だが、そこには幽霊も河童もいなかった。

がっかりと同時に幾分か安堵しながら、もう帰ろう、と口を開こうとした時。

ふいに、沢井が声を上げた。

「なあ、川の中に誰かいねえ？」

「え？」

闇に慣れた目を凝らすと、俺たち以外の人影は見当たらない。

背筋にうつつすらと寒さを感じたのは俺だけではなかったようだ。中島が腕をさすり

ながら、辟易した様子で言う。

「なあ、もういいから帰ろうぜ」

「いや、いるって。赤ちゃん抱いた女だよ。おーい！」

「バカ、やめろって」

「こんなところでなにしてんのー？ え、俺が？ いいけど……」

虚空に向かつて声を張り上げた沢井が突然つんのめり、顔から派手に水の中へ突っ込んだ。

「なーにやってんだよ」

俺たちはどつ、と声を上げて笑った。酔っ払いの悪ふざけだと思ったのだ。

けれど、どうにも様子がおかしい。ライトに照らされた川は底の砂利が見えるほど浅いから、溺れるはずがない。なのに沢井は水に顔をつけたまま手足をバタつかせ、必死にもがいている。

「おい、あれ……なんかヤバくね？」

「早く助けよう！」

急に我に返った俺たちは沢井を助け起こそうとした。だが、彼の体は重石でもつけられたかのようにびくともしない。

まるで、水の中から誰かに引っ張られているような……

「救急車！ いや、その前に誰か助けを呼んだほうがいいかも！」

パニックになりながら、俺たちはなんとか消防を呼んだ。

沢井は駆けつけた救急隊員に助け出されて病院に搬送されたが、すでに手遅れだった。水を大量に飲み込んで、窒息したのだと聞いた。

現場にいた俺たちは揃って警察に呼び出され、事情聴取を受けた。

俺は見たままを必死に伝えたが、信じてもらえなかった。酔っていたせいで沢井を助け起こせなかったんだろう、と言外に非難された。

結局、沢井の不可解な死は事故として片づけられたが、違う。

アイツは女の霊を怒らせたから川に引きずり込まれて殺されたんだ。

少なくとも、あの場面に居合わせた俺はそうだと信じている。



都心部から少し離れた自然豊かな郊外に建つ、私立浄難大学のキャンパスにて。

GWが終わり、花を落とした木々が青々と輝き、新生活に浮かれた気持ちも和らげてきた頃。

本日の講義を終えた如月未那は、構内の外れに位置する旧研究棟へ向かっていた。未那は文学部外国語学科に在籍する大学二年生である。大学生活にはすっかり慣れ

だが、旧研究棟へ足向けるのは初めてだ。

古ぼけた四階建ての研究棟。その最上階に、目的の民俗学予備研究室はある。

未那がその場所を目指しているのには、のっぴきならない理由があった。

民俗学予備研究室には、とある変わり者がいるのだという。

彼は民俗学専攻の院生で、学内からあらゆる怪談や怪奇現象を蒐集^{しゅうしゅう}しているらしい。

人呼んで、『怪談蒐集家』。

怖い話を集めてなにを研究するのかさっぱりわからないが、世の中には様々な人がいるものだ、と大して気にも留めなかった。

——未那自身が、怪奇現象の当事者になるまでは。

大学の構内には学生や院生、教授に助手たちと多くの人間がつどっているはずだが、この旧研究棟の辺りだけは忘れ去られたようにまるで^{ひとけ}人気がない。

他の研究室は、数年前に建てられた新棟にあらかた移っている。学生の間では、あとは民俗学予備研究室の移転さえ済めばこの旧研究棟はすぐに取り壊されるのではないかと囁かれているが、真偽のほどはわからない。

そんな旧研究棟の灰色にくすんだコンクリートの外観からは、諸行無常^{むじやうむじやう}の佻^{わび}しさを感じた。

「ホントにこんなところにいるのかなあ……」

ぼやきながら足を踏み入れた旧研究棟に、人の気配はない。この先にいるのが怪談蒐集家であるという先入観からか、いかにもなにかが出そうな雰囲気を感じた。

恐怖を紛らわすため、未那は高校時代に陸上部で鍛えた足で最上階まで一気に階段を駆け上がった。

目当ての部屋はすぐに見つかった。

階段を上った正面に位置するアルミサッシ製のドアに『怪談、怪奇現象の類いお聞かせください』と几帳^{きちょうめん}面な筆文字で書かれたコピー用紙が貼られていたのだ。あまりにも簡素な案内書きのため、悪戯^{いたづら}ではないのかと疑わしくなってくる。

ドアの前で足を止めた未那は深呼吸して、扉を三回ノックした。

しばらく待つが、返事はない。

試しにドアノブに手をかけたところ、あっさりと開いた。

そうっと覗^{のぞ}き込んだ室内はカーテンが閉められていて薄暗い。場所柄のせい、どこか陰鬱な空気が立ち込めているように感じられた。

「ごめんださーい」

室内に向かって声を張り上げる。奥の暗がり、人型の塊^{かたまり}がのっそりと起き上がるのを見た。冬眠明けの熊を思わせる、緩慢^{かんまん}な動きだった。

「大声を出さずとも聞こえている……用があるならさっさと入ってこい」

「はいっ、失礼します！」

不機嫌そうなバリトンボイスに促された未那は条件反射で部屋に入り、扉を閉める。これで引き返せなくなった。

暗がりの中、手探りでドア横の照明のスイッチを押す。蛍光灯に照らされて、部屋の内装が明らかになった。

ドアを開けて左手には、古そうな本が隙間なく詰め込まれた本棚が等間隔に立ち並び、広くはない部屋を一層手狭に見せている。右手側には六畳ほどの応接スペースが設けられており、窓際に簡素なテーブルと二組のソファが見える。人影はその辺りで起き上がったように見えた。つまり、彼は客用のソファで寝こけていたことになる。閉じたドアを背に覚悟を決め、未那は部屋の主と対峙した。

ソファから立ち上がったのは、ひよろりと背の高い男だった。上背は未那よりも頭ひとつ分高い。いつから洗濯していないのか、雑に羽織った皺だらけの白衣は灰色に淀んで見える。ボサボサの長い黒髪の間から覗く顔色は白を通り越して青く透き通るほどで、かなり不健康な印象を受けた。

目鼻立ちは整っており、身だしなみを整えれば芸能人もかくやのルックスだろうに、本人がまったく頓着していない様子なのはもったいない。

そんな感想はさておき。

「^{あたしのあらや}徒野荒野先輩ですよね。文学部外国語学科二年の如月未那といいます。徒野先輩に、折入って相談があつて来ました」

返答代わりの鋭い眼差しが未那を射貫く。

徒野の無言の圧に気圧されながらも未那は続けた。

「先輩は『ささらぎ駅』をご存知ですか？」

前髪に隠れた徒野の細い眉が僅かに動いた。

「馬鹿にしているのか？ 俺を誰だと思っている」

「研究のためにあらゆる怪談を蒐集している、んですよ。実は、私の親友がささらぎ駅に迷い込んで行方不明になってしまったんです。お願いします、親友を見つけるを手伝ってください」

——^{やよい}夜宵とは小学校の頃からの仲でした。

一年生で同じクラスになって仲良くなった私たちは中学、高校と同じ学校に進学したんですが、高校卒業後の進路は分かれました。私はこの通り大学に入りましたが、彼女は卒業してすぐに就職したんです。歳の離れた妹がいるから、少しでも妹の学費の足しにしたいと言っていました。本当に良い子なんです。

就職してからは夜宵も忙しかったみたいで、最近はなかなか連絡を取れていません

でした。そんな中、夜宵から久しぶりにメッセージが届きました。

『助けて、知らない駅にいる』

これが夜宵と交わしたやりとりの一部始終です。

ミナ…助けてって、今どこにいの？

やよい…きさらぎってところ。鬼って書くみたい。よく考えたらあたしが使ってる路線にそんな駅名ない

ミナ…なにそれ、絶対ヤバイとこじゃん。電車は？ 他に來てる？

やよい…待ってるけど全然來ない。あたしの他にお客さん乗ってなかったし、終電だったのかも

ミナ…始発まで待ってみたら？ てか泊まれる場所ありそう？

やよい…わかんない。どつかの田舎っぽくて近くにホテルどころか家もなさそう。無人駅なのかな、駅にも人いないし、誰かいなか探してみる

ミナ…もう夜遅いし、あんま歩きまわらないほうがいいんじゃない？ 夜に女一人は危ないよ

やよい…そうだけど、あのまま誰もいない駅で寝泊まりするわけにもいかないし。そっちのほうがやばいって

ミナ…そりやそうだけど。てか位置情報は？ わかればタクシーとか呼べるはず

やよい…位置情報見た。なんかバグってる？ どことが表示されない、どうしよう

ミナ…なにそれ。でも電波は通ってるんだよね？ こうして私と連絡できてるわけだし

やよい…待って、誰かいるみたい。ここがどこなのか聞いてみる

ミナ…気をつけて。ヤバそうだったら大声上げて逃げるんだよ

やよい…いなくなっちゃった

やよい…お祭りの太鼓がうるさい

ミナ…祭り？ なにそれ

やよい…ごめん、電池切れそう

メッセージはこれで終わりです。それきり、今も彼女から連絡はありません。

心配になって夜宵の実家に聞いてみたんですが、そちらもなんの連絡もないみたいで、職場も翌日から無断欠勤状態。警察にも相談したんですが信じてもらえないどころか、私の証言だけじゃ事件性があるとは言えないとあしらわれてしまいました。

メッセージのやりとりをしている最中は気づかなかったんですが、夜宵が降りた『きさらぎ駅』って、都市伝説で語られる、あのきさらぎ駅ですよな？

お願いです、夜宵を見つけてください——

「如月といったな」

話を聞き終えた徒野は静かに、しかしきっぱりと告げた。

「俺の目的は怪談を蒐めて研究することであって、事態を解決することじゃない。よって、他を当たれ」

「それができないから、藁にも縋る思いであなたを訪ねたんです！」

語気を荒らげたところで我に返り、未那は慌てて頭を下げた。

「……すみません、一人で熱くなっちゃって」

徒野は意にも介さず、未那に問いを投げかけてくる。

「そもそもお前は、きさらぎ駅についてどれだけ知っている？」

「二十年近く前にインターネット上で流行った都市伝説……ですよね」

未那は頷いた。夜宵からのメッセージを受け、自分なりに調べていたのだ。

二〇〇〇年代初め、『はすみ』なる固定ハンドルネームのユーザーが見知らぬ駅に降り立ったと掲示板サイトに投稿した。その一連の投稿こそ、都市伝説としての『きさらぎ駅』の原点だ。

いつも使っている路線に乗車したものの、なかなか駅につかない。ようやく電車が

止まったのは覚えのない『きさらぎ』という名前の駅だった。

はすみは掲示板ユーザーの助言を受けて家族を迎えを頼んだが場所がわからず、警察もいたずらだと思って取り合わない。線路沿いを歩きながら、はすみは太鼓や鈴の音を聞いたり、片足のない老人に声をかけられたりと奇怪な現象に遭遇する。やがてトンネルを抜け、はすみはそこにいた人物に車に乗せてもらうことになったが、運転手の様子がおかしい、隙を見て逃げるが電池が切れそう……と投稿したのを最後に、書き込みは途絶えた。

釣り——掲示板の住人をからかうための騙りだったのか、あるいは真実なのか。

掲示板ユーザーの間で熱く議論が交わされ、きさらぎ駅はオカルトマニアの間でたちまちブームとなった。

その後、掲示板にはきさらぎ駅に便乗してか、類似の駅に辿りついたと主張する者が続出した。きさらぎ駅の前後の駅とされる『やみ駅』と『かたす駅』、ホームに二メートルほどの黒い影のような人々がいたという『つきのみや駅』、座敷童子のような子供に、身につけていたニット帽をあげることで現実に戻れたとされる『ひつか駅』など……

それだけに留まらず、きさらぎ駅の話は様々な創作のモチーフになり、映画化もされるなど、インターネットを飛び出し盛り上がりを見せた。超常現象を扱うテレビ番

組や鉄道マニアまでもがきさらぎ駅の場所を特定しようと躍起になっていたほどだ。現在では静岡県を走る遠州鉄道の『さぎの宮駅』こそがきさらぎ駅ではないかという説が有力視されており、鉄道会社公認で地域おこしに活かしているのだとか。

「そう、きさらぎ駅は都市伝説だ。はすみの創作とも言われ、その実在は怪しい」

「夜宵が嘘を言ってると言いたいんですか」

未那は徒野の涼しげな顔を睨みつけた。つい険のある口調になってしまふ。

「夜宵の就職先は若い女子社員を終電間際まで働かせる……いわゆるブラック企業でした。だから警察も会社の無断欠勤はバックレたんだろうって、ろくに取り合ってくれなかった。でも、私の知る夜宵は無責任に全部投げ出して逃げるような子じゃない絶対、なにか大変なことに巻き込まれたに違いないんです」

力説する未那を、徒野は冷ややかに見据えた。

「もしもお前の言う通り、親友がなんらかの事態に巻き込まれたとして、お前はどのようなつもりだ？」

「もちろん助けますよ。夜宵は大事な友達ですから、当たり前じゃないですか」

「どうやって？　そも、お前になにができる？」

鋭く、簡潔な問い。未那は言葉に詰まった。

ただ漠然と、夜宵は怪奇現象に巻き込まれたから、怪談蒐集家を頼れば事態は解決

できると考えていた。言ってしまうえば、初めから徒野に丸投げするつもりでいたのだ。

未那自身に、なにができるのか。

具体的なプランが浮かばず立ち尽くしていると、呆れを含んだ溜め息が耳に届いた。「帰れ。なんの力も持たない奴が出しゃばっても迷惑なだけだ。無計画で無鉄砲なバカに付き合ってるほど、俺は暇じゃない」

飛び出した暴言に呆氣に取られているうちに、未那は研究室を追い出されていた。

余人を拒むように固く閉じられたアルミサッシの扉を見つめていると、腹の底から怒りが沸き上がってきた。

「な……な……なんなのアイツ……!?」

未那は目尻をつり上げ、地固太を踏んだ。

夜宵と初めて出会った日のことを、未那は今でも鮮明に思い出せる。

幼稚園を卒園し、小学校に進学する直前。父親の仕事の都合で如月家は違う土地に引っ越した。幼稚園でできた友達と離れ離れになり、同じ小学校に通えないと知った幼い未那はわんわん泣いて両親を困らせたが、すでに転勤も引っ越しも決まったこと子供一人の我儘でくつがえすことはできない。

そうして迎えた小学校の入学式。顔見知りが一人もおらず心細さを感じる中、最初

に話しかけてくれたのが、夜宵だった。

「ねえねえ。わたし、やよいっていうの。あなたは？」

片手を差し伸べ笑いかける夜宵は、同じ年のはずなのに大人びていて、未那の目には後光が射して見えた。

うまが合った、というべきか、二人はすぐに意気投合して仲良くなった。

毎日のように遊び、学年が上がってクラスが分かれても放課後は一緒に過ごした。互いの家に遊びに行くのはしょっちゅうで、それぞれの両親から我が子同然の待遇を受けていたほどだ。夜宵に歳の離れた妹が生まれた時は未那も自分のことのように喜んだし、夜宵の妹も未那をもう一人の姉として慕ってくれた。他の友人から二人の仲について「あんたたちってホントに他人？ 双子みたい」と言われたこともある。

未那はいつか、入学式の日はどうして話しかけてくれたのか、夜宵に訊ねたことがあった。夜宵はくすりと笑いながら、冗談まじりにこう答えた。

「だって未那、捨てられた子犬みたいな顔してたんだもん。放つとけないよ」

「もう、なにそれ」

未那は笑いながら夜宵を小突いた。

きっとその時の夜宵は、純粹な善意で動いただけなのだろう。困っている人を見て見ぬふりしない、というのは褒められるべき美徳だ。だが、誰もができることではな

い。ためらいなく行動に移せる夜宵に、未那は尊敬の念を抱いた。

もしもあの時、夜宵が話しかけてくれなかったら。未那は誰とも打ち解けることができず、ひとりぼっちで小学生時代を過ごしていたかもしれない。夜宵は未那にとって大切な親友であり、恩人でもあり、人として目指すべき手本でもあった。

未那自身、きさらぎ駅の実在に関しては半信半疑だ。よくできた作り話だな、というのが正直な感想だった。

だが、夜宵は冗談こそ言えど、いたずらに嘘をついて他者を惑わす性格ではないと未那は知っている。そんな彼女が、他ならぬ未那に助けを求めてきたのだ。

(やっぱり、このまま手をこまねいてるなんてできない。今度は私が夜宵を助けるんだ。そのために私にできることは……)



「おはようございます！」

予備研究室を訪ねた翌日の朝一番。

未那は、再び徒野のもとへ足を運んでいた。ノックの返事を待たず、ずかずかと部屋に上がり込むとカーテンを開け放ち、薄暗い室内に朝陽を取り込む。

「ほらほら、いつまでカーテン閉めて寝てるんですか。こんなに良い天気なのにもっていないですよー!」

「おい、お前……なんのつもりだ?」

ベッド代わりのソファから身を起こし、ボサボサの髪の間隙から未那を睨む徒野の声には、当惑と不機嫌が色濃く滲_じんでいた。

「昨日の話を聞いていなかったのか? それとも、三歩歩けば忘れる鳥頭なのか?」
 「ちゃんと聞いてましたよ。あれから私なりに考えてみたんです。確かに先輩の言う通り、私はなにもできない。夜宵を助ける方法だって浮かんでない。でも、警察が信じてくれない以上、あなたの他に頼れる人がいないのも事実なんです。だったら、先輩が手伝ってくれるまで私が先輩のお手伝いをしようかと思ひまして」

「どうしてそんな斜め上の発想になる。手伝いなど要らん、大きなお世話だ」

「なにを言われても諦めるつもりはありません。先輩が手伝ってくれるまで、毎日通いますから」

うんざりした表情を隠さない徒野に構わず、未那は背負っていたリュックから保冷バッグを取り出して応接テーブルに置いた。

「私にできることを考えたんです。それでまず、お弁当を作ってきました。先輩、見るからに不健康そうなので、ちゃんと栄養バランスも考えてます。私、これでも料理

は得意なんですよ」

「俺の話が聞こえなかったのか。頭だけでなく耳も悪いのか?」

「悪くて結構です!。ちゃんと食べてもらうまで帰りませんからね!」

「あの……すみません。怪奇現象の相談室はこちらですか?」

口を開きかけた徒野を遮るように、突如として差し込まれた第三者の声。声がした方向を見ると、女性が一人、入り口から控えめに室内を覗き込んでいた。

徒野を訪ねてきた客は、経済学部四年の牛島和佳子_{うしじまわかこ}と名乗った。

背中まで伸びた黒のストレートヘアーに、小花柄がちりばめられたシンプルなブラウスとロングスカート。華美ではないが、懸命に咲く野花のような素朴な美しさを持つ女性だった。

未那はちゃっかりと同席し、和佳子の話を聞くことにした。和佳子は特に嫌な顔をしなかった——というより、未那を研究室の一員だと勘違いしているのかもしれない。徒野も未那を追いつくタイミングを失ったようだし、都合がよかった。

「この写真を見てください」

窓際のソファに腰かける徒野の向かい、つまりは未那の隣に座った和佳子は、スマートフォン画面を見せてきた。そこには満面の笑みを浮かべた二人の女性が写っ

ている。一人は和佳子、もう一人は笑った顔が和佳子と似ている。姉妹だろうか。「こちらは半年前に亡くなった妹の優佳子^{ゆかこ}です。高校一年生でした」

頭に浮かんだ疑問に答えるかたちで和佳子が説明した。どうやら夜宵とその妹と同じくらいの年齢差の姉妹のようだ。

「失礼ですが、妹さんはどうして？」

未那が訊ねると、徒野が余計なことをすると言わんばかりの眼差しで睨んでくる。未那は涼しい顔で視線を受け流した。

睫毛^{まつげ}を伏せたままの和佳子は、硬い口調で問いに答える。

「自殺、だと思われます。夜に川へ飛び込んで、そのまま」

「それは……」

かける言葉が見つからず、未那は言葉に詰まった。

歳の離れた姉妹のようだが、写真を見る限り、仲の良さは明白だ。未那自身は一人っ子であるものの、姉妹同然に過ごしてきた夜宵やその妹の姿が重なり、とても他人事には思えなかった。

「遺体を解剖したお医者様の話だと、妹は妊娠していたそうなんです。私は全然知らなくて、どなたかとお付き合っていたという話も聞かなかったし、もしかすると誰かに無理矢理……」

和佳子はその口を閉ざした。きつく引き結んだ唇が微かに震えている。

優佳子の自殺の原因を察した未那の心が曇る。彼女はきつと、仲の良い姉にも打ち明けられず、一人で抱え込んだ末に自ら死を選んできたのだろう。痛ましく、同じ女性としてもやるせない気持ちになる。

妹の死後、彼女が密かに抱えていた事情を知らされた和佳子の心境を思い、未那の胸は張り裂けんばかりに痛んだ。

もしも事前に気づけていたら、死なせずに済んだのではないか。遺された親族はそんな答えない「もしも」に囚われて、心を痛め続けるしかないのだ。

「しばらく経ってから、妹が死んだ川で死亡事故が相次ぐようになりました。一回だけならただの偶然で片づけられますが、二回、三回と続くとさすがに無関係とは思えなくて」

うつむけていた視線を上げ、和佳子は潤んだ瞳で徒野を見つめる。切なる訴えが真っ直ぐ彼を射貫いた。

「ひょっとして、無念のまま亡くなった妹が被害者たちを川に引きずり込んでいるのでしょうか？ もし妹のせいだったら、と考えると恐ろしくて——一連の事故に妹が関わっているのかどうか、調べていただけませんか」

和佳子の話が一段落したタイミングで、徒野は静かに息を吐き出した。

「どうも勘違いされているようだな。その如月にも言ったが、俺は怪談を蒐めているだけで怪異の便利屋じゃない。ただの物好きな院生に怪奇現象を解決する術があると思っっているのか？」

「そう、ですよね……変なお願いをしてすみません」

肩を落とす和佳子が憐れで、未那は思わず身を乗り出していた。

「つれないこと言わないで、力になってあげましょうよ。怪談を蒐めて研究してるんでしょ？」 先輩の知識が事態解決のヒントになるかもしれないじゃないですか」

慥然とした徒野の鋭い視線がじろり、と未那を捉える。

「そんなに言うなら、お前が力になってやればいいだろう」

「ええっ!？」

徒野から突きつけられた無茶な要求に、未那は素つ頓狂な声を上げる。

「待ってください、私じゃ絶対無理ですって！ 先輩と違って怪談の研究なんてしたことないんですから！」

「誰がお前主導で問題解決に当たれと言った。お前如きに誰もそこまで求めちゃいない。そもそも俺を手伝うと言ったのは如月、お前だぞ。自分の発言には責任を持て」

「ってことは……和佳子さんの依頼、受けてくれるんですね！」

未那の声が弾む。和佳子はうつむかせていた面をバツと上げた。

「本当ですか！」

「勘違いするな。ここでお前たちにごねられると鬱陶しいし邪魔なだけだ。泣かれるのも面倒だし、牛島はともかく、如月はしつこいようだからな」

「いやー、それほどでも……」

「今のを褒め言葉として受け取る奴があるか。いいか如月。見てわかる通り、俺はあまり外出をしない」

「誇れることじゃないですよ、それ」

胸を張って宣言する徒野に未那は呆れてしまう。というか、不健康な見た目に対する自覚はあったのか。

「だから、俺の代わりに動いてリアルタイムでの情報収集ができる手足が必要だ。それくらいならお前程度でもできるだろう？」

「……わかりました。助手として、精一杯お手伝いさせていただきます」

未那は力強く頷いた。いちいち癪に障る言い方だが、徒野の言う通り、手伝いをするといい出したのは未那自身だ。それに、未那の働きが認められれば、夜宵の件も手伝ってくれるかもしれない。

「ああ、本当にありがとうございます……」

和佳子は涙ぐみながら未那の手を握った。未那はそんな彼女の手を優しく握り返す。

「謝らないでください。一緒に優佳子さんの疑いを晴らしましょう！」

牛島姉妹のため、そして夜宵のためにも、一刻も早く事態を解決しなければ。

未那は一人、気を引きしめた。



依頼を受けた週の土曜日。

未那は和佳子とともに、優佳子が亡くなった現場を訪れた。未那という体のいい助手^{パシリ}を得た徒野は研究室に悠々と陣取ったまま、ビデオ通話とかいうかたちで遠隔の現場検証を行う安楽椅子探偵を気取っている。自らは動かないからと気楽なものである。現場は大学から離れた、小高い山間^{やまあい}を流れる下和久川の川辺。U字型にゆるやかなカーブを描く川は流れもゆっくりで、天候に恵まれたこの日は川面が陽の光を反射し、さらさらと煌めいていた。自然の穏やかな光景を目の当たりにした未那は、夜宵の件でささくれだっていた気持ち^{きもち}が洗われる心地だった。

「うーん……とても死亡事故が多発しているようには見えないですね」

画面^{画面}の向こうの徒野にも見えるよう、スマートフォンのカメラをかざしながら未那は呟く^{つぶや}。実際に手を入れて深さを確認すると、川底は手首が浸かる程度と浅い。間

違っても大人が溺れるような場所ではなさそうだ。

とはいえ、大雨などで水嵩^{みずかさ}が増せば危険だろうし、水勢が強ければ足を取られて流される可能性もゼロではない。近頃は短時間で雨が急激に降るような異常気象が多く、山で降った雨が下流に流れ込んで急に増水するケースも少なくないと聞く。

「実は……昔から、この辺りでは河童が出ると言われていたようなんです」

和佳子が控えめに切り出した。

「河童？」

妖怪といえど、と問われれば真っ先に出てくるほどメジャーな存在だが、こんな身近にも出没していたのか。生憎^{あいにく}、未那はこの辺りの出身ではないため、噂を聞いたことはなかった。

『如月は河童について詳しいか？』

徒野の質問に、未那は首を横に振る。

「よく語られる程度のことしか。頭のお皿の水がなくなると死んじゃうとか、キュウリが好物だとか、そのくらいです」

『地域によって呼び方は様々だが、ひょうすべや水虎^{すいこ}、河伯^{かはく}とも呼ばれる。日本各地に伝承が残っているが、中でも柳田國男の『遠野物語^{とのおのものがたり}』で描かれた岩手県遠野市が有名だな。あそこでは町おこしに河童が使われ、捕獲許可証なんかも作っている。河童

は子供ほどの大きさで、如月の言った通り頭部には水の溜まった皿を乗せており、その体表は緑色。嘴くちばしのような尖った口を持ち、指の間には水掻すかきがあり、背中に甲羅こうらを背負った姿でイメージされることが多い。泳ぎが得意で人間を水中に引きずり込み、尻子玉しりこたまという架空の臓器を抜いて殺してしまう。また、相撲も得意とし、よく子供と相撲を取っているという。これも負けると尻子玉を抜かれてしまう。悪戯好きでありながら容赦なく人間の命を奪う残酷さを併せ持ち、かと思えば岩瀬万能膏いわせばんのうこうの逸話では人間への恩返しとして薬の作り方を授けるなど、多面性のある妖怪だ」

徒野は淡々とした口調で淀みなく説明する。未那と和佳子は黙って彼の解説に耳を傾けた。

『河童として伝えられるものの正体の一つに、水死体がある。水辺に現れるのはそのためだ。水難事故への警鐘として、「河童が出るから川遊びには気をつけろ」と子供に言い聞かせることもある。また、河童の見た目――頭に皿がある姿は、川底などに擦れて頭髮が削れた様を表し、尻子玉を抜かれるというのは、ふやけて弛緩しかんした死体を指しているとも言われる』

悲惨な有り様の水死体を想像した未那はぶるりと震えて腕を抱いた。隣の和佳子は蒼白そうはくな顔で呟く。

「優佳子の遺体も、そのようになっていました……」

『遺体の損傷がひどかったのであれば、上流から流れてきたんだろう。衛星写真で確認したが、その辺りは川がU字型に曲がった地点だな？ となると、流れついたものが滞留していてもおかしくない』

未那は周囲を散策してみる。よく目を凝らすと、U字に凹んだ底辺の辺りに落ち葉溜まりができていた。登山や川釣りで出たと思わしきゴミも交じっている。徒野の推測通り、この地点は上流から流れてきた物が溜まりやすい場所なのだろう。

滞留したゴミや落ち葉の中、生前の面影もない無惨な姿で見つかった優佳子を思い、未那の胸が痛む。

生前も死後も、その身をひどく傷つけられた優佳子。さぞかし苦しく、悔しかっただろう。そんな彼女が化けて出たとしてもおかしくはない。

「ここに流れついた優佳子さんが河童になって、人々を川に引きずり込んでいるんでしょうか」

「やっぱり、そうなりますかね……」

和佳子は眉を下げ、不安な面持ちで未那を見つめる。未那としては無責任に同意することでもできず、「いえ、あくまで可能性の話です」と茶を濁した。

『河童になって人を襲った、か。なんのために？』

未那の心遣いも知らず、徒野が話を蒸し返す。無神経な態度にムツとしながら、未

那は必死に思考を巡らせた。

「たとえば、自分を襲った人に復讐ふくしゅうするために、犯人と似たような人を溺れさせてる……とか。ちなみに、ここで亡くなった人たちに共通点とかはありましたか？」

和佳子は記憶を手繰り寄せるように視線を遠くに向けた。

「確か……最初に亡くなったのは優佳子の事件を聞いて肝試しに来た男性でしたが、他にキャンプに訪れた子供や、釣りに来た女の人もいたはずですよ。いずれも溺れるはずのない状況——浅瀬で急に倒れ込んで、起き上がれないまま溺れて亡くなったと聞きました」

優佳子を襲ったのは男性だろうから、女子供は復讐対象に含まれないはずである。未那の仮説はあっさり否定された。

『復讐が目的ならば不特定多数を狙う意味はない。犯人が必ずここを訪れるとも限らないしな。直接襲いに行ったほうが効果的だ』

追い討ちをかけるように徒野が冷たく言い放つ。これには未那もさすがにこたえた。「そんなに否定しなくてもよくないですか？ 結構凹むっていうか……そもそも、なんで人を襲ったのか、先輩が聞くから考えてみただけじゃないですか！」

「頼んだ覚えはない」

「もー！」

結局、収穫らしい収穫を得られないまま、この日は解散となった。

その夜、未那は恐ろしい夢を見た。



未那は昼間に足を運んだ川辺にいた。

時刻は真夜中らしく、辺りは闇に包まれている。昼に見た下和久川は陽の光を浴びて輝いていたが、夜の帷に覆われた今、周囲の闇を吸い込んだ黒い川面はうねる大蛇の背のようで、得体の知れない薄気味悪さを感じる。

なにをするでもなく、ただ立ち尽くして流れる川を眺めていると。

おぎゃあ、おぎゃあ……

赤ん坊の泣き声が耳に届いた。

未那は周囲を見まわす。少し離れた川岸で、自分の居場所を知らせるように赤ん坊が懸命に泣いていた。辺りに親らしき人影は見当たらない。

（なんでこんなところに赤ちゃんが!?）

未那は慌てて駆け寄り、ぐずる赤ん坊を抱き上げる。
赤ん坊は泣きやまない。それどころか、より激しく泣き喚く。自分を抱く腕が母親のものではないと気づいたようだ。

（お母さんはいないの？ もしかして、捨てられた？）

さまよわせた視界の中、川を挟んだ対岸に人影が見えた。目を凝らすと、白い服を身にまとった女性がうつむきがちにほんやりと佇んでいる。彼女が赤ん坊の母親だろうか。赤ん坊の懸命な主張は届いていないのか？

「あの！ この子、あなたのお子さんですか？」

向こう岸に聞こえるような声を張り上げて訊ねたが、返事はない。

不審に思いながらも、彼女が母親ならば赤ん坊を抱かせてやりたいと思った。もし事情があつて手放したのだとしても、まだ間に合う。赤ん坊自身は母親を求めて泣きじゃくっているのだ。もう一度小さな温もりに触れれば、考えを改めるかもしれない。幸い、川底は浅いために歩いて渡れそうだ。他に渡る方法もない。

決心して一歩、川に足を踏み入れたのだが。

「え……？」

ずん、と腕の中の赤ん坊の重みが増した。乳飲み子ならば十キロにも満たないはずだ。それが、まるで巨大な岩を抱いているような感覚。

支えきれず、未那は川の中で転倒した。慌てて身を起そうにも、重石の如き赤ん坊が邪魔になって顔を上げることすらままならない。必死にもがいていると鼻から水が入り込み、激しく咳き込んだところでさらに水を吸い込んでしまった。

溺れる――！

パニックに陥りながらどうにか上げた視線の先。

いつの間に近くまで来ていたのか、足首まで水に浸かり未那を見下ろす女が、口元を歪めてニタリと笑った。

女の顔は、写真で見た優佳子に酷似していた。



「おはようございます……」

翌週の月曜日。未那は新しい弁当を手し、朝一番で民俗学予備研究室に顔を出した。本日出席予定の講義は午後からだだが、あんな恐ろしい夢を見たせいで、一人暮らしの侘しい部屋から一秒でも早く出たかったのだ。それに、徒野であれば未那が見た不可思議な夢に答えをくれるのではないかと、淡い期待もあった。

未那の顔を認めた徒野は仏頂面をさらにしかめた。

「ひどい面をしてるな。寝不足か？」

「万年寝不足みたいな顔した先輩に言われたくないですよ……って、うわ！　なんでこんなに散らかってるんです？」

入室時には気づかなかったが、机の上には所狭しと資料が散乱していた。机に積みきれない分が床にまで散らばっており、周囲は足の踏み場もない。未那は机の資料の山に隙間を見つけると、今日の弁当をそと置いた。

「調べ物をしていた。それよりお前、怪異にまつわる夢でも見たんじゃないか」
話を振る前にずばり言い当てられ、未那は狼狽した。

「どうしてそれを!?」

「朝一で俺のところに來るくらいだから、怪異に関してなにかあったことは容易に想像がつく。寝不足の様子も合わせればわかりきったことだ」

「すごいですね先輩、シャーロック・ホームズみたい」

「御託はいい。どんな夢を見た？」

なぜか食い気味の徒野に、未那は戸惑いながらも夢の内容を説明した。

夢の中で現場の川にいたこと。河原で赤ん坊を拾ったこと。母親と思しき女性が川の中に佇んでいたこと。彼女に赤ん坊を届けようと浅い川に足を踏み入れたところ、赤ん坊が岩のように重くなったこと。重みで転倒し、起き上がれなくなったこと。水

に顔が浸かり、溺れそうだったこと。そんな未那を見て、優佳子に似た女が笑っていること――

未那が語る夢の話聞き終えた徒野は静かに口を開いた。

「お前の話を聞いて確信した。人々を川に引きずり込んだのは河童じゃない。濡女だ」

「濡女……？」

未那は首をかしげる。聞いたことのない名だ。

「水辺に現れる、名前の通り髪が濡れそぼった女の妖怪だ。江戸時代には新潟と福島の間境に濡女が現れたという伝承がある。これによると濡女の尾は三〇〇メートルを超えるため、遭遇すれば逃れる術はないとされる。このことから体は蛇であるとされ、江戸時代の妖怪絵師鳥山石燕の『画図百鬼夜行』でも蛇体として描かれている」

徒野は周囲に散乱した本の中から一冊の図鑑を取り出し、未那に開いて見せた。

そこには髪が長く、首から下が手の生えた蛇のように描かれた女の絵があった。

「また、島根に伝わる伝承によると海辺に現れる濡女は牛鬼の眷属とされ、自らの赤子を他人に抱かせると牛鬼が現れるという。濡女自体は毘達な。人の手に抱かれた赤子は石となり、身動きが取れなくなつたところを牛鬼が喰い殺してしまう。一方、四国や九州に伝わる濡女子は名称こそ似ているものの、こちらは異なる妖怪とされる。

赤ん坊の声がしたのなら泣き声を上げて人を川に誘い込む川赤子の可能性もあるが、母親らしき女がいたとなれば、濡女で間違いないだろう」

長々とした説明を終えた徒野は、骨張った手でボサボサの頭を乱暴にかきむしった。髪が鳥の巣のようになっても気にも留めず、溜め息まじりに息を吐く。

「道理であの辺りに河童の伝承がないはずだ」

「調べ物ってそのことだったんですね」

未那は散乱した資料の山に目を向ける。それにしても、散らかった室内をいったい誰が片づけるのだろうか。もしや、助手の自分だろうか。未那は助手になったばかりでこの部屋に関しては右も左もわからないのだが。

散乱した資料から必死に目を逸らす未那には気づかず、徒野は憮然と吐き捨てる。

「半年前に捨てアカウントがSNSに書き込んだ投稿が河童伝承の発端だった。それ以前に下和久川近辺に河童の話は伝わっていなかった」

「じゃあ、和佳子さんが言ってたことは……」

「それらしい作り話だよ。河伯と下和久、誂え向きに河童の別名と川の名前も似ているからな。まったく、いい迷惑だ」

忌々しげに顔を歪める徒野は相当ご立腹らしい。研究している立場からすると、根拠のない噂話を掘められて憤懣やるかたないのだろう。

「あれ、でも待ってください。あの辺りに河童の伝承はなかったんですよね。それなら、優佳子さんは河童じゃなくて濡女になった……」

未那は首をかしげた。

夢の中で、石となった赤ん坊を抱えて溺れる未那を見下ろし、笑っていた優佳子。あの赤ん坊はひよつとすると、亡くなる前に彼女が身籠っていた子供だろうか。

「いや、それも違う」徒野は首を横に振った。

「下和久川でこの半年どころかここ数年、牛島優佳子なる女が死亡した事件は起きていなかった」

「え——？」

未那は耳を疑った。優佳子は死んでいなかった？ では、和佳子の話は嘘だったというのか？

「強姦されたのを苦に自殺した女が化けて出るという噂は、下和久川の河童の伝承が拡がったタイミングでSNSに投稿されていた。これも別の捨てアカウントによるものだ。だが、昨日一日使ってインターネットの記事と新聞記事をあらかた探したが、そういったニュースはなかった。念のため死亡には至らなかった水難事故に関するニュースも確認したが、それも空振りだった。牛島の言う通り、半年以内に釣り人の女が亡くなったというニュースはあったが、名前も年齢も違うし、なにより死んだの

は男や子供が立て続けに死んだ後、順番としては最後だ。つまりあの女の発言は流布する噂に便乗した、趣味の悪い冗談になる」

徒野は数枚のコピー用紙を投げ捨てるようにテーブルに置いた。それはウェブページやローカル新聞を印刷したもので、その全てが下和久川で起きた水難事故について書かれたニュース記事だった。見出しの下に記された日付を確認すると、どれもこの半年以内のものだ。

それによると死亡したのは順番に、肝試しに訪れていた大学生の男性、家族でキャンプに来た小学生の男の子、川釣りの中年女性……和佳子の言っていた通りだが、やはり優佳子らしき歳頃の女性が死亡した報道はない。

強姦された末に自ら死を選んだ憐れな少女はいなかった。喜ばしいことのはずなのに、消化できない疑問が浮かぶ。

「それなら……和佳子さんは、なんのためにそんな嘘を？」

未那は眉をひそめる。涙ぐみながら徒野と未那に助けを求めた和佳子の姿が演技だったとは、とても信じがたい。

「さあな。本人に確かめる他ないだろうが、大方想像はつく」

徒野は呟くように吐き捨てた。

「いつの世も、怪異を作り出すのは人間なんだ」



『ええ、そうです。沢井——あ、死んだ友人のことなんですけど——あいつ、溺れる前に「川の中に子供を抱いた女がいる」とか言い出して、それで川に入っていったら急に倒れ込んで、そのまま起き上がれなくなって』

下和久川での男性の死亡事故に居合わせたという友人の一人、洲崎すざきにコンタクトを取ったところ、そんな証言を得られた。対面が難しいとの理由から、通話アプリを使って事故当時の話を聞き出した。

『真夜中にそんなところに子連れがいるなんてありえないですよ？ だから、沢井が見たのは幽霊だと思うんです。そこで死んだっていう女の』

川の中に佇む女の幽霊——未那は自身が見た夢の内容を思い出して、身震いした。徒野はそんな未那には構わず、洲崎に問いを投げかける。

「あなた方はなぜ、真夜中にそんなところに？」

『それは……沢井が言い出したんです。肝試しに行かないかって。幽霊が出るって噂自体はSNSで見たとかなんとかで、普段ならそんな不謹慎なことしないんですけど、酔った勢いで、つい……そしたらあんなことになって……あいつを止められなかった

こと、今も後悔してます』

洲崎は悔しそうに声を震わせた。

これで被害者全員の知人から同じ証言を得られた。キャンプの子供の家族、釣り人の女性の同行人によると、被害者たちは溺れる直前、川の中に赤ん坊を抱いた女の姿を見たとき奇妙な言動を繰り返していたという。

洲崎との通話を終えた徒野は深い息を吐きながらソファにもたれかかった。

「ピースは揃った。あとは語るだけだ」

「語るって、誰に？」

首をかしげる未那に、徒野は鋭い目つきを細めて言う。

「牛島だよ。連絡先はわかるな？ 下和久川に呼び出してくれ、あの女には灸を据えてやる必要がある」



調査のために下和久川に足を運んでから、ちょうど一週間後。

『優佳子さんの件についてわかったことがあるそうです。次の土曜、夜七時に下和久川の事件現場に来てください』

和佳子と連絡先を交換していた未那は、そんなメッセージを送り彼女を呼び出した。わざわざ下和久川に呼びつける徒野の意図はわかりかねるが、騙したことについて和佳子を糾弾するつもりかもしれない。

ちなみに、今回は徒野も現場に足を運んでいる。黙した徒野の仏頂面から、その考えは読み取れなかった。

そして助手として関わった以上、未那も同席して顛末を見届けるつもりだ。

緊張で身を固くしながら待っていると、しばらくして和佳子が現れた。

「あら、二人ともお早いんですね。お待たせしてすみません」

「和佳子さん！ すみません、急に呼び出してしまってます……」

徒野は挨拶もせず、単刀直入に用件を切り出した。

「結論から述べると、ここで人が何人も溺れ死んだのはお前の妹のせいじゃない」

「そうですか……」

安堵の息を吐いた和佳子に対し、徒野は淡々と続けた。

「そもそも、お前に妹はいないからだ」

「えっ……」

声を上げたのは未那一人だけだった。和佳子は肯定も否定もせず、黙したままだ。

「お前の家族構成を調べたが、優佳子という妹はいなかった。牛島優佳子という女は、

はなから存在しない、そうだな？」

「そんなことまで調べてたんですか!？」

徒野が発揮した意外な行動力に未那は驚いた。

無愛想で人付き合いの悪い徒野に伝手があるようには見えないが、どうやって調べたのだろう。というか、それこそ助手の仕事では？ 訝る未那を無視して徒野は続ける。

「それから、下和久川に伝わる河童の伝承とやら。お前は昔から、と言っていたが、そんなものはなかった。SNS上に河童の噂は流布していたが、最初に投稿されたのは半年前。それを昔からの伝承とは言えん。適当なことを言って俺を騙せるとも思ったか？」

和佳子は答えない。徒野の厳しい追及は続く。

「ありもしない河童の伝承と、それと関連づけた架空の女の死をSNSにばら撒いたのはお前だな？ 発端となったそれぞれの書き込み、そのIPアドレスを調べればわかることだ」

「ふふ、さすがは徒野さんですね。その様子だと、すでに調べているんでしょう？ 全とお見通しですか」

和佳子は硬かった表情を和らげ、全てを認めて微笑んだ。美しいが、猛毒を含んだ

笑みだった。未那は眉をひそめる。

「どうしてこんなことを……」

「卒論のための実験だったの。SNSに流布した噂で、どれだけの人を騙せるかって結果は大成。大衆をコントロールするのが目的だったけれど、結果として新しい怪異まで作れちゃった」

子供のように無邪気に語る和佳子。未那は愕然とした。彼女の動機が、なに一つ理解できなかった。

「そんな……それだけの理由で？ あなたが流した噂のせいで、実際に人が何人も亡くなってるんですよ。なんとも思わないんですか？」

「どうして？」

「どうして、って……」

笑みを浮かべたまま、和佳子は心底不思議そうに首をかしげる。未那は言葉を失った。

「確かに、噂を作ったのは私。でも、それで人が死んだのは私のせいだって言える？ 罪に問える？ 噂を信じて広めたのは不特定多数の誰か。私一人の責任じゃないでしょう？」

清々しいほど聞き直った言い分だ。未那はなにも答えられなかった。悔しいが、今

の未那は彼女を否定できる根拠を持たない。

「私はこれからも怪異を作っていくつもり。こんなに楽しいこと、他にないもの。私のさじ加減一つで多くの人が踊らされ、騙されていく。まるで私の手で世界という物語を紡いでいるみたい！」

和佳子の両目が爛々と、危険な輝きを帯びる。

「ねえ、徒野さんならわかるでしょう？ あらゆる怪談や怪奇現象を蒐めてるあなたなら、世界の語り手になりたい私の気持ちがい！」

「ああ、まったくわからんな」

昂る和佳子を、しかし徒野は冷たく一蹴した。

「俺は怪異を語るだけの語り部だ。お前のような倫理が破綻した馬鹿と一緒にされては迷惑なんだよ」

「本当に？ あなたは私と同類だと思ってたのに。如月さんの手前、いい格好をしてるだけでなく？」

繰り広げられる毒舌の応酬にも、和佳子はまったく怯まない。

「——そこまで言うなら、望み通り騙ってやる」

徒野は深い息を吐き出すと、視線だけで射殺せるほど鋭い眼差しを和佳子に向けた。

「架空の濡女を使い、人々を川に引きずり込んで殺した牛鬼。それがお前の裡に潜む

怪異だ」

徒野の舌鋒が、和佳子に潜む本質を騙る。

薄い笑みを浮かべていた和佳子の口から、ごぼり、とながか溢れ出した。彼女が

苦しうに喉元をかきむしりながら吐き出したのは、蜘蛛のような体躯に、牛とも鬼

とも形容しがたい、禍々しい角と鋭い牙の生えた化け物だった。

「ひいっ……!？」

未那の喉から引き攀った悲鳴が漏れる。

ゆうに二メートルはあるであろう巨軀は、和佳子の華奢な体内にどうやって収まっていたのだらう。明らかに普通の現象ではない。

「それが牛鬼。お前の醜い内面、そのものだ」

月明かりに照らされ、てらてらと光っていた牛鬼の瞳がぎよろり、と動いた。牙を剥き、へたり込む和佳子目にかけて凶悪な爪を振り上げる。

未那の体は咄嗟に動いていた。彼女を庇い、砂利の上を転がる。鋭利な爪が頬を掠めた。生温かいものが伝い落ちるが、気に留めなかった。

「なんでっ……」

悲鳴に似た訴えが和佳子の口から漏れる。なぜ、自らが意図せず吐き出した化け物に襲われなければならないのか。恐怖に揺らぐ瞳が雄弁に訴えていた。

「徒野先輩！」未那は叫んだ。「やめてください、こんなこと！」

詳しい仕組みはわからないが、牛鬼なる化け物の出現は徒野が引き起こした事態なのだろう。であれば、彼なら化け物にも対処できるはずだ。

しかし徒野は腕を組んだまま、凍てついた一瞥をくれただけだった。

「なぜ？ 怪異に殺されるなら、ソイツも本望だろうよ」

未那に抱かれた和佳子は顔を青くしてガタガタと震えている。

本望？ こんなに怯えてるのに、そんなわけがない。

未那は和佳子の肩を強く掴んで揺さぶった。

「しっかりとってください！ あんなバケモノにわけもわからず殺されて、それで本当にいいの!？」

和佳子は色を失った唇をわななかせながら呟いた。

「よく、よくない……!？」

「聞こえましたか、先輩！ 和佳子さんは否定します！ あのバケモノをどうにかしてください!？」

振り向いた眼前に、牛鬼の爪が迫る。避ける暇はない。

和佳子を庇いながら、未那はぎゅっと目を瞑った。

「まったく、仕方のない奴だ。——お前は、牛鬼じゃない」

——振りがざした爪が、未那を切り裂くことはなかった。覚悟していた衝撃はいつまで経っても訪れず、恐る恐る目蓋を開くと、あれだけ存在感のあった牛鬼は綺麗さっぱり消え失せていた。

「怪異を騙るとはこういうことだ。如月の無鉄砲さに免じてこれくらいにしてやる。感謝するんだな……と、聞いちゃいないか」

徒野は高慢に告げたが、肝心の和佳子は目を剥いたまま失神している。彼女に徒野の声は届いていないだろう。

「徒野先輩……あなた、いったい何者なんですか」

和佳子を抱いたまま呆然と座り込む未那は、問わずにはいられなかった。

「俺はただの怪談蒐集家で、怪異を騙る騙り部だ」

「怪異を、騙る……」

徒野の鋭い双眸が未那を見下ろす。月下に佇む徒野は病的なほど白い肌や彫像の如く整った顔立ちも相まって、牛鬼よりも現実味のない存在に見えた。



週が明けた月曜日の朝一番。